第五講　演習問題(5)

次の文章は、『落窪物語』の一節である。中納言の姫君（落窪の君）は、実母が亡くなり、父中納言に引き取られたが、継母から嫌われ、床の落ちくぼんだ部屋に住まわせられていた。その姫君のもとに中将が通いはじめ、やがて姫君は中将邸に妻として引き取られて、幸福な生活を送っていた。ところが、中将と右大臣家の姫君との縁談が持ちあがり、中将はその縁談を断ったにもかかわらず、中将の乳母が勝手に話を進めてしまった。以下の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

御乳母出で来て言ふやう、

「かの（注1）右の大殿のことは、のたまひしやうにａ（注2）ものし侍りしに、『わざとやむごとなき妻にものし給はざなり。時々通ひてものし給へかし。（注3）殿に聞こえて、四月となむ思ふ』とｂいそがせ給ふなり。さる心し給へ」と聞こゆれば、ｃいと恥づかしげに笑みて、「Ａなでふ、男の否と思ふことを、強ひてするやうかはある。世の人に似ず、よき身にもあらねば、さのたまふ人もあらじ。（ア）かかることなまねび給ひそ。（注4）かたはなり。わざとの妻にもあらざなりとは、いかで知り給ふ。（注5）いとさ言ふばかりなき人にもあらぬを」とのたまへば、乳母、

「（イ）あなわりな。（注6）大殿（おとど）も、しかと思（おぼ）し立ちて、いそぎ給ふものをば。よし、御覧ぜよ。やむごとなき人の強ひてのたまはむことをば、いかがはせさせ給はむ。何かは。君達（きんだち）は、はなやかに（注7）御妻方（めがた）のさしあひて[d]もてかしづき給ふこそ今めかしけれ。思（おも）ほす人ありとても、それをばさるものにて、御文など奉り給へ。（注8）かの君も思ふ時は、上達部（かんだちめ）の女（むすめ）にはあなれど、落窪の君とつけられて、中の劣りにて、（注9）うちはめられてありけるものを、かく類（たぐひ）なく、[e]思しかしづくこそあやしけれ。人は、かたへは父母（ちちはは）ゐたちてかしづかるるこそ心にくけれ」と言ふに、中将面（おもて）うち赤めて、

「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしきことも欲しからず、おぼえも欲しからず、父母具したらむをともおぼえず。落窪にもあれ、上（あが）り窪にもあれ、忘れじと思はむをば、いかがはせむ。人の言はむも多く、そこにさえ[B]かくのたまふこそ心憂けれ。（注10）ただ御為（ため）に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうありなむ」とて、いと頼もしげなるけしきにて立ち給ふめるを、（注11）帯刀（たちはき）つくづくと聞きて、[C]爪弾（つまはじき）をはたはたとして、

「なでふ、かかること申し給ふ。（注12）君と申しながらも、（ウ）恥づかしげにおはすとは見奉らずや。ただ今の御仲は、（注13）人放ちげにもあらぬものを。かののたまひつるやうに、志たがはず、（注14）はなやかなる方にやり奉りて、御徳見むと

思したるか。あな心憂。少しよろしき人の、さる心持たるやはある。なでふ(注15)御名だての落窪ぞ。老いひがみ給ひにけり。これをかのあたりに聞き給ひて、いかが思すべき。今よりかかることのたまふな。君の思したることいと恥づかしくいとほし」と言ふ。

(注)

1 右の大殿のこと――中将と右大臣家の姫君との結婚話を指す。
2 ものし――ここでは、縁談を断る、の意。
3 殿――中将の父、大将。
4 かたはなり――不都合だ。
5 いとさ言ふばかりなき人にもあらぬを――落窪の君はれっきとした妻になる身分ではない方だ、とは言い切れないのに。
6 大殿――中将の父、大将。
7 御妻方のさしあひて――妻の実家の後ろだてが加わって。
8 かの君も思ふ時は――落窪の君のことを考えてみるに。
9 うちはめられて――自由を奪われて。
10 ただ御為に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうありなむ――落窪の君があなたに何も尽くしていないとお思いになるでしょうが、そのうちお尽くし申し上げることもあるでしょう。
11 帯刀――惟成。乳母の子で中将の従者。
12 君――養い君。中将を指す。
13 人放ちげにもあらぬものを――他人がひきはなすことができそうもないのに。
14 はなやかなる方にやり奉りて、御徳見む――勢力のある右大臣の姫君と結婚させ申し上げて、恩恵にあずかろう。
15 御名だての――人聞きの悪い。

問1　傍線部（ア）～（ウ）の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア）かかることなまねび給ひそ
① このようなことは心にかけなさいますな
② このようなことを心におかけになるとよいでしょう
③ このようなことはそっくり取り次いでおっしゃいますな
④ このようなことはまねなさいますな
⑤ このようなことをまねなさるとよいでしょう

（イ）あなわりな
① まあ仕方がない
② なんと理不尽な
③ とても不可能だ
④ ああすばらしい
⑤ ひどくつらい

（ウ）恥づかしげに
① 立派な様子で
② 恥さらしな様子で
③ 気がひける様子で
④ 面目なさそうに
⑤ きまりが悪そうに

問2 波線部a〜eのうち、主語の同じものが二つある。その組合せとして適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① a「ものし侍りしに」とb「いそがせ給ふなり」
② a「ものし侍りしに」とd「もてかしづき給ふこそ」
③ b「いそがせ給ふなり」とc「いと恥づかしげに笑みて」
④ c「いと恥づかしげに笑みて」とe「思しかしづくこそ」
⑤ d「もてかしづき給ふこそ」とe「思しかしづくこそ」

問3 傍線部A「なでふ、男の否と思ふことを、強ひてするやうかはある」の解釈として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① どうして、男がいったんいやだと思った縁談を、すすんで受け入れることがあろうか。
② 何ということだ、男が恥と思っているのに、身分違いの結婚を強いるなんて理不尽ではないか。
③ どうして、男の気のすすまない縁談を、意に背いて強引にすすめる必要があるのか。
④ 何ということだ、男の反対を逆手にとって、無理に破談に持ち込むなんてひどいではないか。
⑤ どうして、男というものは、条件のいい配偶者をかたくなに拒否するのか、理解できないことだ。

問4 傍線部B「かくのたまふ」の内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

① 右大臣が、中将にとって身近な存在である乳母を取りこみ、乳母を介して自分の娘との結婚話を持ちこんだこと。
② 右大臣が、中将の父大将との政治的な取引や中将の将来の出世を絡めて、強引に自分の娘との結婚を促したこと。
③ 右大臣が、落窪の君の存在などとるに足らないと無視して、乳母の意向を汲んで自分の娘との結婚話を進めたこと。
④ 乳母が、両親に大切に育てられ、しかも実家の経済的支援が期待できる右大臣の姫君との結婚を勧めたこと。
⑤ 乳母が、打算的な考えから、中将の意向を無視して、右大臣の姫君との結婚と、落窪の君との離縁を勧めたこと。
⑥ 乳母が、落窪の君の素姓や以前のみじめな境遇に触れ、中将の正妻としてふさわしくないと、離縁を促したこと。

問5 傍線部C「爪弾をはたはたとして」には帯刀のどのような心情が示されているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

① 自分の母である乳母の意見に従おうとしない中将のかたくなさに不快感を抱いている。
② 自分の母である乳母が中将の気持ちを無視して話を進めようとしているのに対して腹立たしさを感じている。
③ 自分の母である乳母の考えは古風だと感じ、同世代である中将の当世風の考え方にむしろ共感を覚えている。
④ 自分の母である乳母の立場もあるが、仕えている中将への義理も果たさなければならず、思い悩んでいる。
⑤ 自分の母である乳母の当世風の考え方も、中将の古風な考え方も、どちらにも一理あると思っている。
⑥ 自分の母である乳母の方が、若い中将よりもかえって当世風の割り切り方をしているのに驚いている。

問6　乳母と中将の結婚に対する考え方の食い違いを説明するものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

① 乳母が愛情の深い妻のほかに経済力のある妻を持つべきだと主張したのに対して、中将は落窪の君も経済力を備えていると強調した。
② 乳母が実家の後ろ盾のない落窪の君とはきっぱりと別れて自分の勧める姫君と結婚するほうが出世できると主張したのに対して、中将は落窪の君への愛情が出世よりも重要だと主張した。
③ 乳母が権門の姫君との結婚がもたらす経済的な利益を強調したのに対して、中将は落窪の君も権門の姫君であることを主張し、落窪の君との結婚を正当化した。
④ 乳母が貴族の子弟は身分の高い妻をたくさん持つべきだと主張したのに対して、中将は自分が多くの妻を持てるほど身分が高くないので一人の妻しか持てないと反論した。
⑤ 乳母が貴族の子弟は親の勧める相手と結婚すべきだと主張したのに対して、中将は落窪の君との結婚は親の了承を得た正式なものであると反論した。
⑥ 乳母が貴族の子弟は妻の父母の援助を受けて大事にされるのがよいと主張したのに対して、中将は妻に対する愛情こそが重要だと主張した。

第五講

〈模範解答〉

問1　(ア)③　(イ)②　(ウ)①
問2　④
問3　③
問4　④
問5　②
問6　⑥

〈現代語訳〉

乳母が出て来て言うには、

「あの右大臣様のこと〔＝中将と右大臣家の姫君との結婚話〕は、（あなた〔＝中将〕が）おっしゃったように縁談を断りましたが、『(今の妻〔＝落窪の君〕は）正式な高貴な身分の妻ではいらっしゃらないようだ。（今の妻には）時々お通いなさいませ。殿〔＝中将の父である大将〕に申し上げて、四月に（自分の娘と結婚をさせよう）と思う』と（右大臣は）せかしていらっしゃるのだ。そういうお心づもりをなさってください」と（中将に）申し上げると、（中将は）たいそう恥ずかしそうに笑って、「どうして、男がいやだと思っていることを、強いてするようなことがあろうか〔＝どうして、男の気のすすまない縁談を、意に背いて強引にすすめる必要があるのか〕（いや、ない）。（私は）世間の人と違って、よい身分でもないから、そのように（婿にしたいと）おっしゃる人もいないだろう。このようなことをそっくり取り次いでおっしゃいますな。不都合だ。正式な妻ではないようだとは、どうして（右大臣は）ご存知なのか。落窪の君はれっきとした妻になる身分ではない方だ、とは言い切れないのに。」とおっしゃるので、乳母が、「なんと理不尽な。大殿〔＝中将の父である大将〕もそのようにとお思いになって、（右

大臣の方でも）用意なさっているのになあ。まあ、ご覧ください。高貴な方が強いておっしゃることを、どのようにしなさるのでしょう〔＝どうしてお断りできるでしょう〕。何も（問題）ないです。公達は、華やかに妻の実家の後ろだてが加わって（妻の実家側が）大切にお世話しなさることが今風だ。思っている〔＝愛している〕人がいたとしても、それはそれとして、お手紙など差し上げなさいませ。落窪の君のことを考えてみるに、上達部〔＝三位以上の人、および四位の参議〕の娘ではあるようだが、落窪の君とあだ名をつけられて、（姉妹の）内でも劣っていて、自由を奪われていたのに、このように比べる物もないくらいに、（中将が）思いなさり大切にお世話するのが不思議だ。姫君は、一方では父母が座ったり立ったりして大切に育てるのが奥ゆかしい」と言うと、中将は顔を赤くして、「（自分は）古風な心だからであろうか、今風で風流なことも欲しくなく、評判も欲しくなく、父母がそろっている（姫君）をとも思わない。落窪にせよ、上り窪にせよ、忘れまいと思うようなのを、どうしようか（いや、どうしようもない）。他人がそう言うことも多く、あなたにまでこのように〔＝経済的支援が期待できる右大臣の姫君との結婚を勧めるようなこと〕おっしゃるのは情けない。落窪の君があなたに何も尽くしていないとお思いになるでしょうが、そのうちお尽くし申し上げることもあるでしょう」と言って、たいそう頼りがいのある様子で立ちなさったようなのを、帯刀〔＝乳母の子であり、中将の従者〕はよくよくじっくりと聞いて、爪弾をぱちぱちとして、「（母上は）どうして、このようなことを申し上げなさるのか。養い君〔＝中将のこと〕とは申しながらも、（こちらが恥ずかしくなるくらい）立派な様子でいらっしゃるとは見申し上げないのか。今の（中将と落窪の君との）御仲は、他人がひきはなすことができそうもないのに。あの右大臣様がおっしゃるように、お気持ちに違えず、勢力のある右大臣の姫君と結婚させ申し上げて、恩恵にあずかろうとお思いになったのか。ああ情けない。少しでも悪くはない〔＝普通の〕人は、そのような考えを持つだろうか、いや、持たない。どうして人聞きの悪い落窪（などと言うの）か。（母上は）年老いてひねくれなさった。これを女君〔＝落窪の君〕がお聞きになって、どのようにお思いになるだろう。今からこのような事はおっしゃるな。中将様がお思いになっていることもたいそう恥ずかしくなるほどいじらしい」と言う。